

クリスマスメッセージ

クリスマスを迎えるために

瀬口 哲夫 ((東京 Y W C A まきば 保育園 副園長)

クリスマスおめでとうございます。この時期になると、キリスト教の子ども施設の多くはイエス誕生の劇の練習を始めます。ある年のこと、5歳児クラス担当の保育士だった私が子どもたちにどんな役をやりたいかを尋ねると、一人の女の子が、赤ちゃんが産まれそうで困っているイエスの母マリアを助けた宿屋の人をしたいと言ってきました。ところがその子のお母さんは、きれいな衣装を着るマリアの役を我が子にさせたいという願いを諦めきれません。マリアの衣装を美しく飾った私たちにも責任があったのかもしれない。子どもを叱るお母さんの姿を見て、苦しむ人々がイエス誕生によって“希望”を見つけだす劇なのに、それを伝えきれない私たちの力のなさを感じざるをえませんでした。

さて、ごく普通の生活を送っていた少女マリアに起きた事件は、彼女にとってとても受け入れられるものではなかったはずですが。未婚の少女が神の子を産むなどという話を誰が信じるでしょう。そんなことが周囲に分かれば石打の刑になってしまいます。驚き恐れて、なぜ私にそのようなことができるのかと天使に尋ねるマリア。それでも「神様に出来ないことは一つもないのです」という天使の言葉に、「お言葉のとおり、この身になりますように」と覚悟を決めます。今も昔も、子どもを産み育てるということは、喜びの時ばかりではなく、苦しい時や辛い時でも“いのちある一人の人間と共に生きる使命”を神から託されることであり、我が子に、自分の時間と自由を与える覚悟が必要なのです。そして、母と子を守り通した婚約者のヨゼフも託された使命を果たした人だったのです。

この時代、定住地のない羊飼いや異なる宗教を持つ者は見下され、迫害されました。それは、まるで現代の難民のようでした。また、病気や障がいがある者、貧しさのゆえに宗教上の掟を守れない者も罪人と呼ばれ差別されました。そのように自分たちと異なる者を見下し、集団で排斥する人間の有り様は今も変わっていません。経済が行き詰まり、力の原理が優先されるようになると、国ばかりか、私たちも自分を守ることに必死になり、家庭や職場、地域での絆を失い、心は渴ききってしまい

ます。私自身も社会の現実を見ないようにして自分が安心できる日常に逃げ込み、そうした世界をつくっているのが自分だという意識を遠ざけがちになってしまいます。

イエスは相手を力で制圧するようなことはしませんでした。周囲から攻撃されても、弱い立場に追い込まれた人々と共に生き、自らのすべてをその人々に捧げました。その生き方から今の世界を見た時、私たちも視点を変えて相手の側に立ち、心の痛みを感じとり、その重荷を共に背負う覚悟を決めなければなりません。

また、事件や災害が続くと、大切な人をなくした痛みや生活基盤を失うという不安が人々の心を闇で覆ってしまいます。様々な問題をかかえながらクリスマスを迎えなければならない人々には「なぜ私にこんなことが起きるのか」という神への大いなる問かけが存在します。今の私には神の意図は分かりませんが、神の計画の中で、この苦しみが何かを新たにするという事だけは信じています。聖書に書かれた「私はあなたを大切に思い、どんな時でも共にいる。あなたに必要なものはすべて知っている。恐れることはない。私があなたの神である」という天の父からの力強いメッセージは私たちを支え、励ましてくれます。それがあって再び希望をもって新しい一步を踏み出せるのです。

クリスマスを迎えるにあたり、身近な人を喜ばせるだけでなく、恵みとして与えられた私たちの力で出来ること、私に求められていることは何かを見つめ直してみたいと思います。